

平成 22 年 6 月 29 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20730499  
 研究課題名（和文） 共同性と個をめぐる生涯学習論的研究  
 —理論研究とフィールド研究のはざま—  
 研究課題名（英文） Study of Lifelong Learning over Cooperativity and Individualism  
 —Between Theoretical and Field Study—  
 研究代表者 安川 由貴子  
 (YASUKAWA YUKIKO)  
 聖母女学院短期大学・児童教育学科・講師  
 研究者番号：30452329

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、個として確立していくことが重視される現代社会の中で、G. ベイトソンのコミュニケーション論を基軸にして、共同性と個人の問題について生涯学習の観点から考察を行った。それは、自己実現、自己決定といった個への重視が、逆説的にどのように個を疎外していくのかを、もう一方の共同性という概念で対比しつつ、実証的に把握する試みである。ベイトソンは、個という存在をすでに共同性や環境のシステムの中に含みこまれている存在として捉えていくことにより、個人を軸とした近代西欧思想に特有の観念を乗り越えようとしていた。その萌芽は、現在の日本社会の過疎地域における生涯学習的な実践や、アルコール依存症のセルフヘルプ・グループの実践においても見ることができた。

## 研究成果の概要（英文）：

The present study examines the relationship between cooperativity and individualism in the field of lifelong learning based on communication theory by Gregory Bateson. It is an attempt to empirically clarify how individualized emphasis such as self-realization and self-determination actually stimulates anti-individual movements, which represent an alternative cooperativity. Gregory Bateson tried to overcome the individual ideology especially within the modern western culture by considering that the individual is already included in the system of cooperativity and the environment. These exploratory attempts were seen in the practice of lifelong learning in Japanese depopulated communities and the practice of alcoholism self-help groups.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：生涯教育学

キーワード：生涯学習、共同性、個、ベイトソン、フィールド研究

### 1. 研究開始当初の背景

1965年にユネスコで生涯学習論が国際的に提起されて以来、特に1980年代以降に生涯学習社会の実現が目指されていく中で、学習者としての視点や個人としてのニーズが重視されるようになっていった。他方、社会教育や生涯学習の理論や実践の中では、1950年代の共同学習論や自己教育運動などにも見られるように、集団の中で共同で学ぶということは常に重視されてきたといえる。また、生涯学習の分野では、J.ハーバーマスのコミュニケーション論の援用をもとに、学習における他者性や共同性について語られることが多い。認識変容の学習論で知られるJ.メジローもまたハーバーマスのコミュニケーション論をふまえている。そこでコミュニケーションとは、あくまで自立的な個人同士による関係性として想定されており、西欧近代的な「個」が確立した自己像が目指されているといえる。

このように、生涯学習における共同性と個人の問題とそれらの関係性は、生涯学習社会がますます広がっていく中で、改めて問い直さなければならない課題ではないかと考えた。そこで本研究では、G.ベイトソンのコミュニケーション論に特に依拠しながら、この研究課題についてアプローチしていくことを試みた。というのは、ベイトソンは、主体という前提を想定せずに、個というものが共同性や環境のシステムの中に取り込まれている存在として捉えていくことによって、西欧近代に特有の個人に重点を置いた思想を乗り越えようとしていたからである。研究を通じて、相互主体性としてのコミュニケーション論とは異なる新たな関係性の理論を見出し、生涯学習の理論や実践の中にも生かしていくことができるだろうと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究では、共同性と個という問題を、生涯学習論的な観点から研究していくことを目的とした。自己実現や主体的な自己の形成など、個あるいは個人として確立していくことが重視されつつある現代の中で、共同性や他者との関係性をいかに考えるかということを変更して検討していく必要があると考えたからである。

現代社会の中で、自立的な個人になることが目指される中で、他者との関係性が二者択

一的に否定されるわけでは決してなく、むしろ積極的に重視されているとはいえるが、目指されているのは相互主体的なコミュニケーションの促進であるといえる。このような主体や個という枠を前提とした西欧近代的な個人像・自己像に対して、個という存在がすでに共同性や環境のシステムの中に取り込まれているような存在としての思考を前提にした見方が、新たに必要なのではないかと考えた。

このような問題意識のもと、理論研究とフィールド研究の両方の側面から考察していき、理論研究とフィールド研究のはざまに見えてくるずれや課題をも見出すことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究においては、理論研究とフィールド研究を並行して行った。

#### (1) 理論研究

- ① G. ベイトソンのコミュニケーション論についての研究。特に、自己や環境との関わりからの視点から、「関係性」を出発点とした理論の認識のあり方を考察。
- ② J. ハーバーマスのコミュニケーション論における相互主体的なコミュニケーションに関する考察。J. メジローの認識変容の学習論におけるJ. ハーバーマス理論との関わりや、G. ベイトソンの理論との関わりについての考察。
- ③ 地域社会における共同性や、特に中山間地域における地域再生及び地域づくりに関わる実践や理論についての文献研究。
- ④ アルコール依存症からの回復に関わるセルフヘルプ・グループ（アルコールリクス・アノニマスや断酒会）に関わる文献研究。

#### (2) フィールド研究

- ① 2006年度より京都大学大学院教育学研究科と京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地域において始まった、地域住民と協働の新しい学びの空間づくりに、一緒に参加していくことを通じて、過疎地域の生活における共同性と個の問題について、考察を行った。
- ② セルフヘルプ・グループ（特にアルコール依存症からの回復をめざすアルコールリ

クス・アノニマス（AA）や断酒会）への参与観察を行った。AAは、現在では様々なテーマ内容で広がっているセルフヘルプ・グループの誕生の元となった活動であり、ベイトソンもAAについての論文を執筆している。同じ体験をした当事者同士による体験の共有を通じた自助、相互自助のプロセスの中に、共同性と個人に関わる新たな関係のあり方を見出していけるヒントがあるのではないかと考えた。

### (3) その他

- ①G. ベイトソンの理論研究を深めるために、アメリカのカリフォルニア大学、サンタクルーズ(Santa Cruz)校の図書館に所蔵されている、ベイトソンのアーカイブスを訪問し、本研究に関わる資料収集を行った。

## 4. 研究成果

(1) G. ベイトソンのコミュニケーション論について、理論研究だけでなくフィールド研究とも重ね合わせていくことで、より理解を深めることができた。

ベイトソンは、人間中心の世界ではなく、常にエコシステムとの関わりの中で世界を認識していくことを提起している。そこに、個人を思考の出発点とするのではなく、関係性を思考の出発点とする捉え方との繋がりを見出すことができた。ベイトソンは、個としての確立を重視していないからといって、共同性の中に埋没していくことを意味していたのではないということも実証的に示唆することができた。また、「私」ということや認識のあり方それ自体の変容をも射程にいった「学習とコミュニケーションの階型論」の存在を常に意識しながらフィールドとも関わっていく中で、私たちの生きるプロセスの多面性や重層性についての考察を深めていくことができた。

(2) 環境や関係性のネットワークを理論の前提とするG. ベイトソンのコミュニケーション論に依拠しながら、J. ハーバーマスにおける相互主体的なコミュニケーション論を背景に理論展開している成人学習論者、J. メジローの認識変容の学習論との接点を読み解いていくことを中心に、学習理論としての考察を行った。

そこでは、メジローは、認識変容の理論におけるプロセスの提起の部分では、ベイトソンの学習の階型論を援用していることや、学習における「意味」やコンテクストを重視していることから、理論上の類似性は見られた。しかしながら、学習における「個人」や「自己」の捉え方については、自己そのものを確固としたものとして確立していくこと

を目指すメジローと、自分の弱さやありのままの姿をも認めながら他者や環境との関係性において自己の存在を捉えていくベイトソンの考え方との間には差異があることが示唆された。

(3) フィールド研究では、2006年度から京都大学大学院教育学研究科と京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地域との協働の学びの空間づくりの活動と一緒に参加していくことを通じて、地域における共同性と個との動的な関係性の実態を知ることができた。

地域の寄り合いや共同作業、祭祀の場などへの参与観察なども通じて、共同性が大切にされつつも、共同性の維持が困難になってきている実態、あるいは、生活スタイルの変化に伴い共同的な部分の必要性自体が年月の流れの中で変化してきていることを実態的に知ることができた。

また、地域の成り立ちの違いによる、共同性的志向と個人的思考の微妙な差異についても、様々な場面において見出すことができた。

(4) もう一つのフィールド先として、アルコール依存症者のセルフヘルプ・グループ（アルコールクス・アノニマスや断酒会）のミーティングや例会、記念集会における参与観察を通じて、アルコール依存症からの回復にとって、共同性と個人という問題がどちらかに偏ったり優先されたりするのではなく、むしろ同時に成立し必要とされていることを見出すことができた。そして、そのことが、相互主体的な自己像ではなく、共同性や環境をすでに含みこんでいる存在としての自己像の実践の一つであるのではないかと示唆された。そして、依存から自立へという一方向的な志向性ではなく、人間の現実の弱さやありのままの姿を認めることからスタートする、新たな一歩の方向性を見出せた。

また、AA（アルコールクス・アノニマス）や断酒会のミーティングや例会に参加していく中で、過去の自分の生き方の見つめなおしや、ものの見方の変容へと繋がっていく現実と、実際に希望をもって新しい生を生きとおられる多くの人に接する中で、生きることと学ぶことが結合した生涯学習のプロセスとして捉えられると考えた。人が生きるということの深さと可能性についての考察を、ベイトソンの学習論との関係性を意識しながら深めることができた。

### (5) 今後の課題や展望

これらの研究を通じて、理論とフィールドを相互に行き来しながら研究を進めていく

ことの効果と重要性を再認識することができたものの、研究成果としては十分にまとめることができなかった。

今後の研究活動の中でさらに考察を深め、今後の研究成果に生かしていきたい。そして、ペイトソンのコミュニケーション論を基軸にしなが生涯学習における理論と実践についての研究をさらに深めていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①安川由貴子、認識の変容に関わる学習論の考察—J. メジローの変容的学習論から G. ペイトソンを読む—、京都大学生涯教育学・図書館教育学研究、査読無、第8巻、2009、pp.11-28。

[学会発表] (計3件)

- ①安川由貴子、認識変容の学習論における自己概念に関する考察—G. ペイトソンのコミュニケーション論をめぐって—、日本社会教育学会、第55回研究大会、自由研究発表、2008年9月20日、和歌山大学。
- ②安川由貴子、認識変容の契機に関する障害学習論的考察—G. ペイトソンのコミュニケーション論をもとに—、関西教育学会、第60回大会、自由研究発表、2008年11月9日、大阪教育大学。
- ③安川由貴子、地域と子ども・おとなを結ぶ学習活動—「総合的な学習の時間」の可能性と課題—、日本社会教育学会、第56回研究大会、自由研究発表、2009年9月19日、大東文化大学。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

安川 由貴子 (YASUKAWA YUKIKO)  
聖母女学院短期大学、児童教育学科、講師  
研究者番号：30452329

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：